

文献要約

ヤクーチャ地方・チュコト半島のハクチョウ(1)

藤 卷 裕 蔵

ハクチョウ類の生態の中でも渡りについて強い関心もたれているが、北方の資料がほとんど知られていないため、詳しいことがわからないままとなっている。そこで日本に渡来するハクチョウ類の繁殖地の一部であるヤクーチャ・チュコト半島における状況を2, 3の本からひろって紹介してみたい。

なお、ソ連の沿海地方、サハリンについては「ソ連極東南部のハクチョウ1, 2」(釧路博物館報)に紹介してあるので、参照していただきたい。

ヤクーチャのハクチョウ

ヤクーチャのハクチョウについては、ウォロビヨフ(1963)の「ヤクーチャの鳥類」からオオハクチョウ、コハクチョウの部分の全訳をあげておく。

オオハクチョウ：近年シベリア北部における動物学者たちの研究により、この種の分布に関するかつての資料に多くの知見が加った。例えばオオハクチョウの繁殖地はかつて知られていたよりはるか北部まで広がっている。北東ヤクーチャのコルイマ川下流域では北緯69度まで繁殖している。

N. I. チャが私に3卵のあるオオハクチョウの巣について知らせてくれた。このハクチョウの巣は1954年6月23日にポリシャ・コニコバヤ川とスタドゥヒンスク支流(コルイマ川下流)間の森林ツンドラで見つかった。卵は抱卵されはじめたばかりであった。卵の大きさは74.2×112.0、74.6×112.0、75.3×116.2mmであった。

このように北方での繁殖発見と関連して興味あるのはエニセイ川下流域におけるオオハクチョウの繁殖発見である。E・E・スィロエチコフスキーとE・V・ログACHEフは次のように述べている。「われわれは1959年7月にオオハクチョウをエニセイ川右岸ウスチ・ハンタイカ地方(ツルハンスクの北方約300km)で発見した。この森林北限地域ではオオハクチョウは少ないが、いつも見られ、カラマツ・モミの疎林、カンバ林で囲まれた湖で営巣している」(スィロエチコフスキー・ログACHEフ 1959)。このように新しい資料によると、エニセイではオオハクチョウの分布北限は北緯68度15分までのびている。

ヤクーチャにおけるオオハクチョウの主な営巣地はヴィリュヤ流域である。古い資料はかつてこの地域でもオオハクチョウが多く見られたことを示している。例えば100年ほど前1854年にヴィリュヤ川、ルンフ川(レナ川左支流)下流地方を旅行したR・K・マークは次のように書いている。「ヤクーツカ下流120露里のレナで、最初の群(19羽)が4月17日に現われ、その後4月29日までには少なくなり、小群となった。これは明らかに悪天候のためであった。この時にいくつかの小群が南、南西へ飛ぶのが見られた。

4月29日にルンへで再び北へ向う大群が見られた。ほぼ同じ頃、ヴィリュヤ河口の島や州では数千羽が見られた。ヴィリュヤ付近の無人湖、その北部の支流で繁殖する。」

最近10年間でヴィリュヤ流域におけるオオハクチョウの数は非常に減少し、いくつかの地域で

は完全にいなくなった。これは昔からこの地域の人々の間に広く行われていた換羽中のハクチョウを長年にわたって利用してきたためである。

ある猟師の報告で、1957年8月後半にレナ川（ヴィリュヤ川下流域）の大きな島の一つでオオハクチョウの巣立幼鳥が見つけた。体は大きい、まだ飛べない4羽の幼鳥が全部採集された。採集された雌の体重は9800gであった。

コハクチョウ：ヤクーチャでコハクチョウはツンドラ全域にわたって営巣し、その他の場所や森林ツンドラにも生息する。ポリショエ・リャホフスク島では繁殖していない。ルチレンスキー（1958）の資料によると、コハクチョウは島にまれに飛来するが、毎年のことではない。1939年7月に、1羽が島の北西岸で観察された。

1957年の夏に私はコニコヴァヤ川沿のツンドラ、チュコチ・ニジネ・コルイマ地域のツンドラで普通に繁殖することを発見した。私の観察では、コハクチョウはツンドラの沿海部にもっとも多く、南部ツンドラの森林限界では非常に少ない。

私の資料では、コハクチョウが春に営巣場所に渡来するのは5月20日頃であるが、ツンドラはまだ雪におおわれており、川には氷がはりつめている。例えば1957年にコルイマ川沿のツンドラでは初認個体は5月21日に見られた（猟師の話では、ハクチョウのなき声はすでに5月15日に聞かれた）。

1960年春には5月23日にフロマヤ川とインジギルカ川間のツンドラで最初の個体を観察した。ブィタンタイ川中流域のヴェルホヤンへの飛来は1959年5月25日に見られた。飛来方向は北である。

ミヘリ（1935）の観察では、インジギルカ川にコハクチョウが飛来したのは川の解氷よりはるか以前であった。1929年にモマ川河口で初認は5月17日であった。ルスコエ・ウスチエのツンドラでは1930年の初認はやっと6月2日になっ

てからであった。

1957年5月24日にコニコヴァヤ川のノタノヴァヤで採集した雌の卵巣はよく発達しており、大きい3胞は直径21・23mmになっていた。

5月27日に採集した雄の精巣は長さ23mmであった。

私の資料ではコハクチョウの産卵数は通常3～4卵である。

1962年の夏に私の助手V・I・ペルフィリヨフはホリマ川とインジギルカ川間のツンドラでコハクチョウの巣を2つ見つけた。

6月12日の最初の巣には抱卵前の3卵があった。このように遅い産卵は1962年春と夏にツンドラを見舞った異常に寒い天気のためである。

コハクチョウの2番目の巣は相当抱卵がすすんだ4卵とともに6月27日に発見された。

卵の大きさは1) 65.8×98.5、66.1×100.2、67.1×103.9mm 2) 65.5×101.7、66.9×102.2、67.3×107.4、68.2×102.1 であった。

換羽は7月中頃から始まった。この時期に私はネプピチヨ湖南東岸（ニジネ・コルイマ地方）に集まっている数多くのコハクチョウを観察することができたが、ここで換羽中であった。

ミヘリ（1935）の報告にはコハクチョウの換羽に関する次のような観察がある。8月8日にインジギルカのデルタで雌雄と2羽の幼鳥からなる家族が観察された。追ってもこの時期に換羽中のため、親は翼を開かずツンドラを走って逃げた。これらが最初に見られた小湖の岸にはハクチョウの新しい羽毛がたくさん落ちていた。

8月11日に観察したコハクチョウは幼鳥と一緒にいたが、少し飛べた。

繁殖地からの秋の渡りは比較的小そく、9月初旬からはじまり、同月の20日頃まで続く。ヤクーチャ南部におけるコハクチョウの渡りは、しばしば10月初旬にも観察された。

コハクチョウは産業上重要ではない。この地域
でコハクチョウは猟期にガンと一緒に獲られる。

採集したコハクチョウの大きさ(cm)と体重(Kg)は
次のとおりである。

1957年5月にコニコヴァヤ川沿のツンドラで

	体 重	開翼長	翼 長	尾 長	嘴峰長	体 重
雄	128	209	52	20	10.3	6.6
雌	120	204	50.5	22	—	5.8

現在、わずかしかな分化してないコハクチョウの
西部と東部の2亜種の分布限界を多少とも十分に

明らかにすることはできない。